

佳作

靖国神社に祀られた朝鮮半島出身英霊を顕彰しよう

松木 國俊

68歳

朝鮮近現代史研究所 所長

慰安婦問題や徴用工問題等をめぐって、日韓関係は戦後最悪と言われる状況を呈している。だが全ては「日本がかつて朝鮮半島を植民地支配した」という間違った歴史観に基づいた無意味で不幸な対立に過ぎない。二十世紀の前半、日本民族と朝鮮民族は同じ「日本国民」を形成し、共に力を合わせてアジアの発展に尽くした時代があった。それこそが日本統治時代の真実の姿である。

中でも昭和十六年に始まった大東亜戦争では朝鮮半島出身の多くの若者が日本軍に志願し、「植民地解放」という大義の下に、「大和魂」にも匹敵する勇敢な「朝鮮魂」で白人に立ち向かった。激しい戦いの中で実に二万一千人の朝鮮半島出身の兵士や軍属が陸に散華している。神風特別攻撃隊として出撃した者も数多い。戦いには破れたものの、大東亜戦争を戦ったからこそ人種平等の世界が地球上に実現した。そしてその陰に数多の朝鮮の人々の活躍があったことを、我々は決して忘れてはならない。

しかし、戦後韓国では日本統治時代の歴史がねじ曲げられ、日本軍人や軍属として戦死した朝鮮半島出身者は「命を日本に売った売国奴」とされてしまった。遺族も身内に「売国奴」がいることを恥じ、靖国神社に祀られた彼らを参拝する者は誰一人としていない。このままでは彼ら

の魂は永久に闇の淵を彷徨うことになるだろう。

あの戦争を戦った日本人の子孫として私はそれを座視することは出来ない。彼らの抱いていた夢と理想、そして民族を思う気持ちの後世へ語り継ぎ、その御霊を慰めるべくここに筆を取らせてもらった次第である。

陸軍士官学校出身者の活躍

朝鮮の人々はいかにして日本軍人となったのだろうか。日韓併合直後の明治四三年（一九一〇年）に朝鮮半島で創設された憲兵補助員制度によって大量の朝鮮人が日本軍人として採用された。しかし彼らは大正八年（一九一九年）の憲兵警察制度の廃止に伴い全て警察官に転向している。その後昭和十三年（一九三八年）に陸軍特別志願兵制度が出来るまでは、ごく一部の例外を除けば日本の陸軍士官学校を卒業することが朝鮮人が日本軍人となる道であった。

日本人にとっても最難関の陸軍士官学校に、朝鮮人として合格した生徒は当然ながら極めて優秀な人物がそろっていた。彼らがその本領を最初に発揮したのは昭和十二年（一九三七年）七月七日、国際条約に基づいて支那事変は昭和十二年（一九三七年）七月七日、国際条約に基づいて駐屯していた日本軍が北京近郊の盧溝橋付近で演習中、中国側から発砲されたことが発火点となった。日本側は不拡大方針のもとに隠忍自重して和平交渉を行ったが、ことごとく中国側によって覆されて泥沼に陥り、七月二十九日には北京の南に位置する通州で中国人兵士による日本人大量虐殺が起きた。あの忌まわしい「通州事件」である。文字にするのも憚られるほど残酷な方法で多数の婦女子を含む二百二十五人が惨殺され、犠牲者の半数は朝鮮人が占めていた。

朝鮮半島全土に「暴支膺懲」の機運が漲り、京城（ソウル）駅では中国戦線へ出征する日本軍兵士を毎日数万人の朝鮮の人々が歓呼の声で見送った。

その中には李應俊中佐、金錫源少佐、劉升烈少佐、白圭錫少佐、劉寛

熙大尉、殿柱明中尉など陸軍士官学校出身の多くの朝鮮人指揮官がいた。中でも陸軍士官学校二十七期卒の金錫源少佐は山西省東苑での戦いで、大隊長として激戦の先頭に立ち、凄まじい白兵戦の末に一個大隊で一個師団を撃退した。この功績で金錫源少佐には朝鮮人で初めての金鵝勲章が贈られている。日本兵を率いてかつての宗主国である支那を撃つことは、当時の朝鮮人にとって夢のような出来事であり「金錫源少佐万歳」の声が朝鮮半島中に轟いたのである。

支那事変（日中戦争）を契機に創設された特別志願兵制度

金錫源少佐の活躍もあり、朝鮮半島では「自分も日本軍兵士として戦いたい」と多くの若者が血書をもって入隊を志願した。受け入れられず自殺するものすらいたのだ。

これに対応するために朝鮮総督府は日本政府と協議の上、昭和十三年に「特別志願兵制度」を創設し、これによって陸軍士官学校に入らずとも日本軍人となる道が開かれた。この制度における志願倍率は次の通りである。

採用者数	応募者数	倍率
昭和十三年	四〇八人	二、九四八人
十四年	六一三人	一、一三四八人
十五年	三、〇六〇人	八四、四四三人
十六年	三、二〇六人	一四四、七四三人
十七年	四、〇七七人	二五四、二七三人
十八年	五、三〇〇人	三〇三、二九四人

競争倍率は極めて高く、昭和十七年に至っては競争率六二・四倍に達しており、合格者は最初から下士官クラスの能力があったという。

志願兵として支那事変に従軍した日本軍兵士の中に李仁錫一等兵がいた。昭和十四年（一九三九年）の南昌攻略戦において彼は朝鮮人志願兵

として最初に戦死している。朝鮮総督府情報課が編纂した『新しき朝鮮』には、次のような逸話が記載されている。

「李仁錫一等兵も最後まで奮戦したが『李一等兵出てはあぶない』と制止する分隊長の声を聞きながら、身近に迫って来た敵兵に銃剣をかざして飛び込もうとした瞬間惜しくも手榴弾の爆片を受けてその場に倒れ、ついに最後を知るや戦友の手にとられ『天皇陛下万歳』を奉唱して半島志願兵最初の戦死を遂げたのであった。後で『その戦死の様はまことに壮絶、志願兵として立派なものでした』とわざわざ部隊長が朝鮮総督府あてに報告している」

大東亜戦争への覚悟を決めた朝鮮の人々

昭和十四年（一九三九年）に欧州で大戦が勃発。「他国の戦争への不介入」を公約に当選した米国大統領ルーズベルトは、対米開戦を決意させるまで日本を追い詰めた。自国が攻撃されれば大戦に介入できるからだ。日本は戦争を避けるために必死でアメリカ側と交渉し、七重の膝を八重に折って妥協を重ねたが、平和を望んでいない相手に誠意が通じることがない。最後はABC包囲陣によって石油をはじめあらゆる資源調達の道が絶たれた。日本が生き残るためには、アジア地域を白人の植民地から解放して各民族を独立させ、共存共栄の経済圏を打ち立てる以外になくなったのだ。

朝鮮の人々も日米交渉を固唾を飲んで見守り、米国の非妥協的で不遜な態度に切歯扼腕した。「米英撃つべし」の声が日増しに高まり、昭和十六年（一九四一年）十月二十二日には朝鮮臨戦報国団（以下報国団）の結成大会が開催された。この大会には各道の発起人代表ら六百名が参加し、開会の辞を崔燐、司会を高元勲、経済報告を李晟煥が受け持ち、皇軍への感謝決議文などを採択すると共に、次の綱領を可決した。（『親日派』林鐘國（御茶ノ水書房））

- 一、我等は皇国臣民として皇道精神を宣揚し思想統一を期す。
- 二、我等は戦時体制に即して国民生活の刷新を期す。
- 三、我等は勤労報国の精神に基づき国民皆労の身を挙げんことを期す。
- 四、我等は国家優先の精神に基づき国債の消化、貯蓄の励行、物資の供出、生産の拡充に邁進せんことを期す。
- 五、我等は国防思想を普及すると同時に一朝有事の秋には義勇防衛の実を挙げんことを期す。

さらに報国団が十二月四日に開催した米英打倒大講演会では、戦後韓国の国会議員にもなった詩人の朱耀翰が「ルーズベルトよ答えよ」と題する次のような演説を行っている。

「正義人道の仮面を被り、搾取と陰謀を欲しのままにしている世界の放火魔、世界第一の偽善君子、アメリカ合衆国大統領ルーズベルト君。：君は口を開けば必ず正義と人道を唱えるが、パリ講和会議の序文に、人種差別撤廃文案を挿入しようとした時、これに反対し削除したのはどの国であり、黒人と東洋人を差別待遇して同じ席にもつかせず、アフリカ大陸で奴隷狩りを、あたかも野獣狩りをするが如くしたのはどの国のものであつたか。．．．しかし君らの悪運は最早尽きた。．．．一億同胞。．．．なかなか半島の二千四百万は渾然一体となつて大東亜聖戦の勇士とならんことを誓っている。」

そして十二月八日、ついに大東亜戦争の火ぶたが切られた。真珠湾に香港にマレー半島に日本軍の向かうところ敵はなく、朝鮮の人々はその破竹の進撃に熱狂した。

志願兵募集に殺到した朝鮮の若者

大東亜戦争が始まると、特別志願兵募集に朝鮮の若者が殺到した。先に示した通り昭和十七年には採用数四〇七七七人に對し、二五四、二七三

人が応募している。実に競争倍率は六二・四倍である。朝鮮は儒教国家であり、応募するには父母、親族の許しが必要である。この驚くべき倍率の陰には、大東亜戦争へ對する朝鮮民族全体の圧倒的な支持があつたことが伺われる。

普成専門学校（高麗大学の前身）の校長を務めた朴贊雄氏も「日本統治時代を肯定的に評価する」（草思社）の中で次のように述べている。

「韓国の反日感情というものは、植民地後期においては上流下流の階層を問わず、全く見当たらなかつたものである。この反日感情は終戦後、李承晩大統領が個人的偏見と政治的戦略のもとに煽り煽つた結果である。もしその当時、韓国の一般民衆の間に反日感情が漂つていたら、志願兵応募者の数が多かるうはずもなく、志願者は周囲の目をおもんばかつたであらう。四〇〇名募集に一五万名（ママ）が殺到したとすれば、志願兵はそれこそ、朝鮮大衆の羨望の的であつたに違いない」

軍隊の中では階級こそがすべてであり、出身地による差別は全くない。朝鮮出身の上官に内地出身の兵隊は絶対服従していたと、私がかつて直接取材した元日本軍将校も証言している。

朝鮮人将校の奮戦

大東亜戦争で朝鮮の人々は「旭日旗」の下に勇敢に戦つた。戦場で指揮をとつた朝鮮人将校たちの壮烈な物語をここに紹介しよう。

（一）崔慶祿

昭和十三年（一九三八年）に志願兵第一期生として入隊した崔慶祿は、ソウルの龍山に駐屯していた第二十師団に配属された。彼は陸軍准尉の時に同師団の作戦参謀であつた小野武雄大佐に目をかけられ、「君は將來朝鮮民族の指導者となるべき人だ」といつて陸軍士官学校の受験を勧められた。崔准尉は小野大佐の期待に応えるべく、毎日の猛訓練に耐え深夜まで勉強に励み、見事士官学校に合格した。

しかしこの時、第二十師団に東部ニューギニアへの出動命令が出され、

崔准尉は悩んだ挙句、日本陸軍のエリートへの道をなげうち「大義に殉じる」ためにニューギニアに出陣した。昭和十八年（一九四三年）三月に東部ニューギニアに到着した第二十師団は各地を転戦、九月二二日にラバウルと東部ニューギニアを結ぶダンピール海峡の要衝フィンシハーフェンへの攻撃を開始した。十一月十九日の第二次総攻撃で崔准尉は切り込み隊長（小隊長）となり、部下十九人を率いて密林の中を敵に忍び寄った。そして先頭に立った崔小隊長は、群がる敵兵に対し日本刀を振りかざして猛然と切り込みを敢行した。

恐れをなした敵兵は、退却しながら自動小銃を乱射し、崔小隊長は、至近距離から全身八カ所に敵弾を受けて倒れた。何とか生き残った伝令の出田上等兵は、腹部に被弾しながら崔小隊長をあるいは担ぎ、あるいは引張り、三日かけて味方の第一線にたどり着いた。出田上等兵の傷は既に腐敗しており、そこでついに絶命した。ひとりならば助かったかもしれない。

ちょうどその時、小野武雄大佐が偶然にも前線視察に来ており、負傷した崔小隊長を発見した。驚いた彼は「崔小隊長を殺しては、陛下と韓国民に申し訳がたたん！出田上等兵はよくやってくれたと、褒めてやってくれ」と林連隊長に要請し、小野大佐の参謀肩章のついた外套を崔小隊長にかけてやった。

参謀肩章の威力は絶大である。彼は重要人物として最優先で後方に送られ、重爆撃機でマニラの陸軍病院へ運ばれた。その後も別府、小倉、東京の陸軍病院で療養し、八カ所全てが致命的といえる傷を完全に癒すことができた。第二十師団はその後もアメリカ軍と終戦まで死闘を続け、小野大佐も壮烈な戦死を遂げている。

崔慶祿は、終戦後韓国陸軍に入隊し、陸軍中将に昇進し参謀総長として活躍した。さらに駐メキシコ大使、駐英大使、駐日大使を務めており、小野大佐の目に狂いはなかった。

日本に外国大使が赴任する際は、皇居で天皇陛下に信任状を奉呈するが、通常は十分で終わるところ異例中の異例で、かつての大元帥陛下と切り込み隊長は四十分も話し込んだそうだ。彼はその内容を語っていないが、

いが、小野大佐や出田上等兵のことも陛下に報告されたにちがいない。きつとお二人の間に熱いものがこみ上げたことであろう。

〔九〕一九九五年二月号「最後の日本刀」高橋文雄より

（金永秀）

支那事変で活躍した金錫源大佐には三人の男児がいた。長男は金永秀といい日本の陸軍士官学校第五七期卒である。彼は少尉に任官するや「俺の親父は偉い。有名人だ。その七光りで内地にいたいと思われたくない」と父親が高級軍人であるがゆえに第一線に出されたいことを潔しとせず、船舶特別攻撃隊員に志願してフィリピンに赴いた。乗艇の四式肉薄攻撃艇がアメリカ軍の空襲で焼失し、やむを得ず地上部隊としてルソン島各地を転戦し、昭和二〇年（一九四五年）四月一六日バタンガス州マレブンヨ山のアメリカ軍陣地を、中隊の先頭に立ち軍刀をふるって攻撃中、敵弾により壮烈な戦死を遂げた。

父親である金錫源氏は昭和五五年（一九八〇年）に東京市ヶ谷にある偕行社（旧陸軍将校及び自衛隊将校OBの会）の総会に招かれ、「自分の長男は戦争に参加して戦死した。それは軍人として本望である。本人も満足であろう」と挨拶した。並み居る旧日本軍たちも、「金錫源将軍」に軍人精神の神髄を見て感動したそうである。

〔九〕一九九五年二月号「最後の日本刀」高橋文雄より

（金貞烈）

金貞烈大尉はパイロットとして大活躍をした。父親も伯父も日本の陸軍士官学校を出ており、彼自身もその五四期生で航空士官学校戦闘機科を抜群の成績で卒業した。

彼は当時の最新鋭戦闘機「飛燕」の戦隊長として、南部スマトラ基地でパレンバン、ジャワなどの防空任務につき、数々の武勲を立てて「墜王」と呼ばれている。日本軍大尉として終戦をブノンペンで迎えた彼は、昭和二一年に韓国に帰国。韓国軍に入隊し、空軍士官学校校長などを歴任しながら空軍の独立に尽力し、韓国空軍初代参謀総長に就任。「韓

国空軍の生み親」といわれ、国防大臣から最終的に総理大臣まで上り詰めている。

特攻隊で散った朝鮮の若者

靖国神社に祀られている朝鮮半島出身の英霊二万一千余柱の中には一四柱の特攻隊員も含まれている。その人たちは一体どのような思いで飛び立っていったのだろうか。

(林長守)

昭和十九年(一九四四年)十二月七日、フィリピンレイテ島オルモック湾の敵艦に突入した「勤皇隊」(隊長・山本卓美中尉)十名の中に林長守軍曹という朝鮮半島出身者がいた。

少年航空兵出身の林長守軍曹は抜群の技量を持っており、人柄も良く、山本隊長は是非彼を日本に帰して少年飛行兵の指導に当たらせたいと思いつつも説得した。しかし特攻隊に志願した彼は頑として聞かず、隊長が「これは命令だ」と言っても、彼は「私のたった一度の反抗です。そういう命令は聞くことができません」とついに承知することはなかった。やがて出撃の日が来て、彼は二式双龍(屠龍)十機の中の一機に乗り込んだ。

「勤皇隊」は駆逐艦と輸送駆逐艦の二隻を大破させ、最後はアメリカ軍によって沈められるという戦果を挙げている。林長守軍曹は朝鮮人最初の特攻隊員であった。(享年不詳)

(『日韓2000年の真実』名越二荒之助編著(株式会社国際企画)より)

(金尚弼) (日本名 結城尚弼)

昭和十八年(一九四三年)ソウルの延禧専門学校(現在の延世大学の前身)を卒業した金尚弼は陸軍航空隊を志願した。厳しい試験をくぐり抜けて同校からだだ一人合格し、特別操縦見習士官一期生となった。

休暇で朝鮮に戻った彼は、校長の勧めで学生の前に立ったが、多くを語らず「俺について来い」というなり上着をぬいで走り出した。在校生も教職員も一緒に走った。誰も落伍する者はいなかった。走り終わってから彼は「これが大和魂だ」と語り、感激した在校生は金を出しあって日本刀一振りを購入して彼に送ったそうである。

その後金尚弼は在校生から兄のように慕われ、慰問袋や慰問品が彼に届き、彼も「毎日飛行機の勉強です。先生が良いから雀の子くらいにはなりましたが、まだ荒鷲のところまではいきません」という近況報告や「一人でも多く自分の後へと続かせてください」という後輩への思いを込めた手紙を何度も母校へ送った。校内では「金尚弼に続け」という機運が盛り上がり、翌昭和十九年(一九四四年)には同校から五名が特別操縦見習士官に合格し、金尚弼は喜びに震える手紙を校長宛てに出している。

その後、彼は昭和二十年(一九四五年)二月十一日満州・新京で新しく飛行隊が編成された時に特攻隊に志願した。彼が家族に最後の別れをするために平壤に戻ると、彼の兄である金尚烈は彼に思いとどまるよう説得した。しかし彼は「僕は日本人になりきって日本のために死のうとしていけるではありません。日本を勝利に導いてその暁に我々の武勲を認めさせて、独立にもって行くことです。大東亜共栄圏として、ビルマ、インド、インドネシア、朝鮮、みな独立の道があるはず。．．．戦友や部下たちとは一心同体であり、民族のしこりや壁はありません。．．．民族の魂は売り渡していません。朝鮮の魂で頑張ってきました。僕の考えはきつとご先祖様も許してくれると思うのです」そう言って兄に別れを告げたのだった。

それから約一カ月後の四月三日、金尚弼は「武刺隊」第五編隊長として小林勇第二編隊長と共に宮崎県新田原基地を飛び立ち、在校生から送られた日本刀と共に、敵艦隊の対空砲火の中をくぐり沖繩西方洋上の艦船群に突入した。(享年二五歳)

(『日韓2000年の真実』名越二荒之助編著(株式会社国際企画)より)

〔卓庚鉉〕（日本名 光山文博）

大正九年（一九二〇年）慶尚南道で生まれた卓庚鉉は、家族と共に日本に移住し、立命館中学から京都薬学専門学校（現京都薬科大学）を出て、金尚弼と同じく特別操縦見習士官一期生となり、大刀洗陸軍飛行学校知覧分校に入校した。彼はそこで近隣の「富屋食堂」の鳥濱トメ一家と親しくなり、他の基地へ転属後も文通を続けている。

昭和一九年一〇月、卓が陸軍少尉を拝命した直後に京都にいた母親が逝去した。母の遺言は、「文博はもうお国に捧げた体だから、十分にご奉公するように」という内容のものであった。やがて、父もまた同じ気持ちであることを知った卓は特攻を志願。こうして彼は特攻隊員として再び知覧の土を踏んだ。

卓は最初の外出日に懐かしい富屋食堂を訪れた。トメはすぐに卓が特攻隊員であるという事実を悟った。何故なら、この時期に知覧に戻って来るのは、特攻隊員ばかりだったからだ。以降、卓は富屋食堂に毎日のように顔を出した。いよいよ迎えた出撃前夜の五月一〇日、卓はトメにこう語った。「長い間、いろいろありがとう。おぼちゃんのようないい人は見たことがないよ。俺、ここにいると朝鮮人っていうことを忘れそうになるんだ。でも、俺は朝鮮人なんだ。長い間、本当に親身になって世話してもらってありがとう。実の親も及ばないほどだった」そして彼は故郷の歌であるアリランを歌った。

トメは、卓と一緒に声揃えた。トメと娘たちは、嗚咽しながら大粒の涙を流し、最後には四人、肩を抱き合うようにして泣いた。それから、卓は形見として、トメに自らの財布を手渡した。その夜の別れ際、トメは自分と娘たちが写った写真を「これ、持ってって」と差し出した。卓は、「そうかい、おぼちゃん、ありがとう。みんなと一緒に出撃して行けるなんて、こんなに嬉しいことはないよ」と言い残し、灯火管制のために暗い夜道を、手を振りながら去って行ったという。

翌二一日、第七次航空総攻撃が行われ、卓は午前六時三三分、爆装した一式戦闘機「隼」に搭乗。知覧飛行場の滑走路から出撃した。卓の搭乗機は、陸軍計二九機、海軍計六九機と共に、沖縄近海を目指した。や

がて、航行する敵艦船群を確認した編隊は、特攻作戦を開始。アメリカの空母一隻、駆逐艦二隻を「戦列復帰不能」とした上、オランダ商船一隻に損傷を与えた。（享年二四歳）

〔WEB VOICE〕早坂隆（平成二七年七月公開）より）

〔崔貞根〕（日本名 高山 昇）

茨城県鉾田陸軍飛行学校の出身者が編纂した戦没者追悼録に、次の一文がある。

「私の生涯忘れられることの出来ないお方。その方は崔貞根。私が十八歳になったら結婚しようと約束された方でした。昭和二十年四月二日、沖縄の空に二四歳の若い命を散らされてしまいました」この文章を書いた梅沢ひでという女性は、女子挺身隊として奉仕していた時に崔貞根と知り合い、あわただしく婚約した。

崔貞根は一九二一年、満州と接する咸鏡北道に生まれ、京城帝国大学と陸軍士官学校に合格し、親日家の父親の影響もあって陸軍軍人となった人物である。陸士第五六期を卒業した彼は、第六航空軍飛行第六六戦隊に配属された。昭和十九年末、第六航空軍はフィリピンで大打撃を受け、沖縄戦に向けて悲壮な覚悟で特攻部隊の編成をしており、その頃に二人は知り合った。始めから叶うことのない結婚の約束であった。崔貞根は一九四五年四月二日、沖縄北方の徳之島から出撃し、沖縄を目指して北上中の敵艦群に体当たりし戦死した。第六航空軍からは「身 halves 二生マルモ至誠忠常二国ヲ憂へ率先シテ陣頭ニ立チ部下ノ倚望殊ニ厚シ」と異例とも言える感状が出ている。（享年二四歳）

二人のお付き合いは僅か四カ月に過ぎなかったが、彼女は平成十七年（二〇〇五年）に天寿を全うするまで、生涯高山中尉を慕い続けたという。ひでさんの遺骨は彼女の遺言どおり、高山中尉が戦死した沖縄の海に散骨された。

〔SAPIO〕二〇〇九年九月九日号「民族の反逆者か祖国の英雄か 2つの歴史が引き裂く朝鮮人将校の特攻精神」(斐淵弘より)

(朴東勲) (日本名 大河正明)

朴東勲は昭和十八年(一九四三年)福岡の大刀洗陸軍飛行学校本校に、乙種陸軍少年飛行兵第十五期生として入校した。翌年三月に卒業し、大刀洗京城教育隊で五ヵ月間飛行訓練を受けた後、満州・興城の第二七教育隊およびハルピン・馬屋講の第二六教育隊で九七式戦闘機による飛行訓練を受けた。教育期間中朴東勲は常にトップクラスであった。昭和二〇年(一九四五年)一月に特攻に志願し、誠第四一飛行隊の一員として知覧から沖縄中飛行場へ前進、同年三月二十九日に嘉手納西方洋上の敵艦に突入した。まだうら若い十八歳だった。

彼の葬式には当時の阿部信行朝鮮総督自らが参列した。当時の総督は朝鮮における「大統領」のような存在であったため町中大騒ぎとなったが、阿部総督はすこしも偉ぶることはなく、父親に対して「こういう折り、内鮮一体だから頑張ろう、などの話はやめましょう。私の息子も戦死しました。息子を亡くした親同士として話しましょう」と語りかけた。これを聞いて両親は感激落涙したという。朝鮮の伝統では高官の子弟は前線に行かないのが当たり前であり、総督の息子までが戦死するなどあり得ないと思っていたのだ。

朴東勲の家族は北朝鮮側に住んでいたため、戦後財産は全てソ連軍に没収され、「親日派」として冷遇された。朝鮮動乱で南に逃げた後も、親日派としての経歴から多くの辛酸をなめ、父親は失意のうちに亡くなったという。

それでも死ぬまで父親は阿部総督と会った時の話を朴東勲の弟たちに話して聞かせ、「お前の兄さんは犬死ではない。自分が考えた道を果たしたのだ」と誇らしく語った。さらに「日本という国は決して悪い国ではない。特攻で死んだ家族に対して、必ず責任を持つ国だ。父は東勲と一緒に死んだ日本の人たちの家族と会って涙を流したい」とつねづね話していたのである。きっとあの世で息子に再会し、その手に抱きしめて共に涙を流したことだろう。日本人として私はそう願わずにはいられない。

(「開聞岳」飯尾憲士著(集英社)より)

特攻で亡くなった朝鮮出身者は他にもたくさんおられる。以下お名前とその最期のみ列記する。

- (朝鮮名不明) (日本名 近藤幸雄)
- 昭和十九年一月二五日 フィリピン方面で戦死 (享年不詳)
- (印在男) (日本名 松井秀雄)
- 昭和十九年一月二九日 フィリピンレイテ湾にて戦死(享年不詳)
- (河東繁) (日本名も同様)
- 昭和二〇年四月一六日 沖縄周辺洋上艦船群突入戦死 (享年不詳)
- (李允範) (日本名 平本義範)
- 昭和二〇年四月二二日 沖縄周辺洋上艦船群突入戦死(享年二三歳)
- (朝鮮名不明) (日本名 木村正碩)
- 昭和二〇年四月二八日 沖縄周辺洋上艦船群突入戦死 (享年不詳)
- (李賢載) (日本名 広岡賢載)
- 昭和二〇年五月二七日 沖縄周辺洋上艦船群突入戦死(享年一八歳)
- (朝鮮名不明) (日本名 金田光永)
- 昭和二〇年五月二八日 沖縄周辺洋上艦船群突入戦死(享年一八歳)
- (朝鮮名不明) (日本名 石橋志郎)
- 昭和二〇年五月二九日 沖縄周辺洋上艦船群突入戦死(享年二七歳)
- (韓鼎実) (日本名 清原鼎実)
- 昭和二〇年六月五日 沖縄周辺洋上艦船群突入戦死 (享年二〇歳)

これだけ多くの朝鮮の若者たちが日本の勝利のために特攻隊で散って行ったのだ。

朝鮮人斯く戦えり・・

朝鮮出身特攻兵の「大義」

戦後日本の反日ジャーナリズムや映画界は朝鮮出身特攻兵たちが「侵略国日本に強制されてあるいは騙されて死なざるを得なかった犠牲者で

ある」という方向に議論を誘導してきた。どうしても彼らを「犬死」にさせたいのだろう。しかし、既に述べたように彼らは決して強制されもせず、まして騙されるほど愚かではなかった。彼らにもいろいろな思いがあり、自分たちの信じる「大義」のために殉じたのだ。

では彼らの「大義」とは何だったのだろうか。「愛するものを守りたい」という気持ちもあるだろう。ここで自分がやらねば朝鮮人は子々孫々に亘って「二等国民」として差別されるのではないかという危機感もあっただろう。あるいは金尚弼のように「日本を勝利に導いてその暁に我々の武勲を認めさせて、独立にもっていく」という思いを持った人もいたことだろう。そして彼らが一命をもって大東亜戦争に殉じる決意をしたからには、この戦争への固い信念もあつたはずだ。「この聖戦で日本人に負けない朝鮮人の魂を見せてやる」それこそが彼らの究極の「大義」だったのでないだろうか。

朝鮮民族そしてアジア民族の幸せを願いつつ、敵艦に突つ込み若い命を散らしていった彼らの死は決して無駄ではなかった。それは植民地を解放し、人種平等の世界を作るための崇高な犠牲であつた。これを「騙されて死んだ犬死」に貶める者は、もはや人間としての資格を疑われても仕方がないだろう。

冤罪で処刑された朝鮮半島出身の若者

戦後連合国は我が国の将兵をB C級戦犯として一方的に軍事裁判にかけた。実態は戦勝国による復讐裁判であり、弁護側の証拠は一切無視され、検察側の主張どおりの判決が出された。こうして一千人以上が処刑され、百人あまりが収容所での残酷な拷問によって死亡したのだ。その後の調査で処刑された人の三分の一以上が冤罪であることが分かっている。そして死刑となつた「日本人」の中には、朝鮮出身者が二三人も含まれていた。

その内の一人がフィリピンで処刑された洪思翊中将である。彼は

一八九〇年にソウルで生まれ、一九歳の時に韓国の武官学校から日本の陸軍幼年学校へ編入した。その後、陸軍士官学校、さらに陸軍大学をそれぞれ優秀な成績で卒業し、順調に昇進を重ねて一九四〇年には少将となつた。温厚で人望も厚く日本人の部下に慕われており、一九四〇年から四一年にかけては旅団長として支那の大軍相手に数々の戦果を挙げている。

朝鮮人としての誇りも高く、創氏改名が許されても彼は朝鮮式姓名をそのまま氏名として使用した。終戦時に彼はフィリピンの捕虜収容所所長の任にあり、捕虜虐待容疑で軍事裁判にかけられることになつた。あくまで復讐のための裁判であり、彼を死刑にするために検察側に有利な証拠や証言ばかりが続々と採用され、弁護側の証人はゼロであつた。しかし彼は裁判の間、一言も弁明せず、全ての罪を一身に引き受け、最後まで帝国陸軍軍人としての誇りを失わず従容として処刑台に上つた。

そのような高潔な人物であつたにも関わらず、戦後韓国では「親日派の巨魁」「民族の裏切り者」「反逆者」の烙印を押された。早稲田大学を卒業して朝鮮銀行に勤めていた長男の洪国善は、李承晩の直接命令で退職させられ、未亡人李清業も一切の職業から締め出されている。

また、軍人ばかりではなく、朝鮮人軍属も戦犯として非業の死を遂げている。その一人朴成根少年は、捕虜を十九発殴つたというだけでオランダによる軍事裁判で死刑になつた。当時は小学校でも児童にビンタは当たり前であり、まして軍隊では日常茶飯事だつた。東洋人を蔑視して言うことを聞こうとしないオランダ兵に思わず手が出るのは致し方なかつただろう。オランダに降伏した日本軍もこんな罪もない十九歳の少年が死刑だなんてとんでもないと嘆願したが、復讐に狂つているオランダ人が聞き入れることはなかつた。

日本側の終戦処理司令官であつた馬淵逸雄少将は、処刑の数時間前に朴成根少年に「戦争で負けたばかりに君にこんな目に合わせて申し訳ない」と謝罪した。すると彼は「何、仇に裁かれては仕方がない。こうやってオランダを睨んで死にましよう。しかしアジアは独立しますよ。日本の勝ちですよ」と答え、愛国行進曲（見よ東海の空明けて・）を韓

国語で歌ったのだ。馬淵少将は、面会時間が過ぎ、最後に千万無量の手を握り合つて別れたが、彼の瞳は「もうこれで思い残すことはない」と言っていたそうである。

〔日韓2000年の真実〕名越二荒之助編著(株式会社国際企画)より

大東亜戦争真の勝者は日本

戦争で勝ったか負けたかは、その戦争目的が達成されたかどうかにかかっているはずだ。大東亜戦争での日本の戦争目的は、次の点に集約されるだろう。

①資源(特に石油、鉄鋼原料、ゴムなど)を自由に輸入できるようにすること。

②日本製品の輸出市場を世界に確保すること。

③亞細亜の植民地を解放し、諸民族を独立させ、共存関係を結ぶこと。

一方、米英の対日戦争目的は、主として次の二つだろう。

①満州を含む中国市場の確保。

②有色人種唯一の軍事大国日本を潰し、白人による世界支配の永久化を図る。

戦後の世界を見ると、何と日本の戦争目的は全て実現している。一方米英側は戦争目的である「軍事大国日本を潰す」ことには成功したものの、中国市場は共産化して長期間取引すらできず、白人による世界支配どころか、すべての植民地を白人たちは失ってしまった。

戦争の「勝利」が軍事的制圧ではなく、「戦争目的の達成」であるならば、日本は大東亜戦争で「勝った」ことになる。今日の日本とアジアの繁栄は大東亜戦争に事実上「勝利した」結果であり、戦死した日本軍人は「軍国主義の犠牲者」ではなく、日本国を「真の破滅」から救うとともに、白人による世界支配を打破し、人種差別をなくした、有色人種全体の偉大な「英霊」なのだ。

朝鮮半島出身の英霊を顕彰しよう

そしてその中には朝鮮半島出身者約二万一千人が含まれていることは冒頭で述べた。朝鮮半島出身の人々は「朝鮮魂」を胸に抱きつつ大東亜戦争を日本国民として戦い抜いたのだ。彼らは日本のためによく頑張ってくれた。静岡県上空に襲来したB29に体当たりし、爆撃から日本人の命を救った河田清治少尉も朝鮮半島の出身であった。彼らの犠牲的精神を私たちは決して忘れてはならないだろう。

しかし既に述べた通り彼らは戦後韓国で「日本のために利敵行為をした親日派」「民族の裏切り者」として糾弾され、その遺族もまた迫害されている。特に特攻隊で散った若者は「自ら進んで敵に命まで売り渡した最大の売国奴」とされ身内からも疎まれていた。一体彼らの魂はどうなるのだろう。

「日本という国は決して悪い国ではない。特攻で死んだ家族に対して、必ず責任を持つ国だ。」この朴東勲の言葉が胸を締め付けてくる。

大東亜戦争で散った朝鮮半島出身者は、世界史に貢献した「朝鮮の英雄」であり、日本の誇りである。彼らの名譽を回復し、その功績を後世に永く語り継いでいく義務が私達にはあるはずだ。さらにこのような先人が成し遂げた偉業を韓国の後進が知るならば、自分たちの歴史認識の大きな誤りに気が付き、日韓の間に真の和解が訪れる日も来るだろう。

ならばなによりもまず靖国神社に詣で、その階(きざはし)で朝鮮半島出身の英霊に深く感謝を捧げよう。「日本の同胞よ、やつと我々を思い出してくれたか？」その声がかきつと我々の胸に響いてくるに違いない。

以上

(参考図書及び論文)

『日本統治時代を肯定的に評価する』朴賛雄(草思社)

『日韓2000年の真実』名越三荒之助編著（株式会社国際企画）

『WEB VOICE』早坂隆（平成二七年七月公開）

『開聞岳』飯尾憲士著（集英社）

『SAPIO』二〇〇九年九月九日号「民族の反逆者か祖国の英雄か
2つの歴史が引き裂く朝鮮人将校の特攻精神」 斐淵弘

『丸』一九九五年二月号「最後の日本刀」 高橋文雄

『伝統と革新』平成二五年十月号「大東亜戦争と朝鮮人 我ら斯く戦え
り 彼らは」 村田秀樹